Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 物語文章史と指示語 |
| Author(s) | 神谷, かをる |
| Citation | 語文. 1981, 39, p. 31-43 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68689 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 物語文章史と指示語

神谷かをる

現代語の指示体系については、佐久間鼎博士はじめ各文法家のかなり整然とした論述があるし、最近では、語彙や対照文法の方面からも研究されている。ところが、平安時代も含めて、古代語の指示体系となると、体系があるか否かも明らかでないし、指示するという、話し手自身の意識と密接な機能を負う語であるがゆえに、追体験は不可能であるし、書き残された少しの資料からしか察知しえない。しかも、指示機能は、本来は、話し手の話の現場においてなされるから、書き残されたものでは十分にわかりにくい。会話文といえども、話しことばそのまゝでなく、書きことばの要素が入るし、その作品の地の文の影響もうけている。

筆者は、平安時代の物語文章史に興味を持ち、敬語や推量表現の面からこれを探った（「物語文章史と敬語」「物語文章史と推量表現」『国語と国文学』昭51年11月、52年10月）。指示語については、その平安時代における用法を原理的に解明しなければならないが、今は、文章史の面から探ってみたい。そこで、先ず会話文における用例を調査し、それと地の文での用例とを比較しつゝ、文章史に触れようと思う。

なお、指示語といっても、体言的・代名詞的用法に限って扱うことにする。具体的にいえば、「コ・コノ・コレ・ココ・コチ」「ソ・ソノ・ソコ・ソチ」「カ（ア）・カノ（アノ）・カレ・カシコ・カナタ（アナタ）」等である。副詞用法の「カク・カウ・サ・シカ」や接続用法「サテ」などは、体系的に原理づけてゆく場合に切り離せないものだが、当面の目的にはかえって複雑になるので省いた。

会話文では、数量的に、コ＞ソ＞カの順になって表われている。「コ・ソ・カ」は、独立例は極めて少ない。「コノ・ソノ・カノ」については、下に「人」が付くか否かで分けた。「ノ」以外の助詞の付く例は「コハ」「ソガ(5)例・ソモ(1)例・ソヨ(3)例・ソハ(1)例」以外に見出せなかった。その他いろいろ会話文での特色があるが、地の文での説明において述べてゆくことにして、すぐ地の文での用法を各作品毎にみてゆこう。

## ―古今和歌集―

仮名序・詞書・左注と分けて表示した。仮名序では、コ＞ソ＞カ、詞書では、ソ＝カ＞コ、左注では、コ系のみである。「コノ」は、詞書・左注では「この歌」の形のみであり、仮名序でもその形が多い。「コレ」も左注では歌のみをさす。

| 会話文 指示語 | こは | この人 | 他 | これ 人 | 他 | ここ | こちら | こなた | コ 計 | そ | その人 | 他 | それ 人 | 他 | そこ | そちら | そなた | ソ 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 古今集(詞書) | | | 1 | | 4 | | | | 5 | | | | | | | | | |
| 古今集(左注) | | 2 | 2 | | 1 | | | | 5 | | | | 1 | | | | | 1 |
| 竹取 | 1 | 11 | 35 | 1 | 9 | 3 | 1 | | 60 | 1 | 1 | 7 | | 12 | | | | 21 |
| 伊勢 | | 7 | 7 | 1 | 2 | 1 | | | 19 | | | | | | | | | |
| 大和 | | 6 | 10 | 2 | 5 | 7 | 2 | | 32 | | 3 | 4 | 1 | 2 | 2 | | | 12 |
| 平中 | 2 | 8 | 16 | 2 | 10 | 9 | | 1 | 48 | | 5 | 6 | 1 | 4 | 1 | | | 17 |
| 落窪 | 8 | 59 | 108 | 30 | 58 | 78 | 2 | 7 | 350 | 7 | 11 | 24 | 10 | 17 | 16 | 1 | | 85 |
| 源氏 | 5 | 43 | 70 | 7 | 31 | 15 | 2 | 6 | 180 | 2 | 16 | 39 | 5 | 13 | 4 | | 3 | 80 |
| 計 | 16 | 136 | 249 | 43 | 120 | 113 | 6 | 14 | | 10 | 36 | 80 | 17 | 49 | 23 | 1 | 3 | |
| | | (697) | | | | | | | | | (218) | | | | | | | |

| 会話文 指示語 | かの人 | 他 | かれ 人 | (あれ) 他 | かしこ | あなた | 計 カ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 古今集(詞書) | | | | | | | |
| 古今集(左注) | | 1 | | | | | 1 |
| 竹取 | 2 | 7 | | | | | 9 |
| 伊勢 | | | | 1 | 1 | | 2 |
| 大和 | 3 | 3 | 2 | | 1 | | 9 |
| 平中 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | 4 |
| 落窪 | 29 | 28 | 6 | 1 | 12 | 2 | 78 |
| 源氏 | 32 | 15 | 4 | 3 | 7 | 2 | 63 |
| 計 | 67 | 54 | 13 | 5 | 22 | 5 | |
| | | (166) | | | | | |

(注) 挙げていない形は見られない。会話文には心話文も含めた(厳密には分けるべきであり、いずれ考え直したい。)源氏物語は、桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花の巻のみ。

。……なぐさむるは歌なり。この歌天地のひらけし時よりいできにけり。(仮名序)

。隣より常夏の花をこひておこせたりければをしみてこの歌をよみてつかはしける。(詞書167 みつね)

。この歌はある人のいはく橘のきよともが歌なり。(左注125 読人しらず)

。これは仁和の御べの伊勢の国の歌(左注1085)

| ソ 計 | そなた | そち | そこ | それ 他 | それ 人 | その 他 | その 人 | そ | コ 計 | こなた | ここ | これ 他 | これ 人 | この 他 | この 人 | 地の文 指示語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | | | | 2 | | 9 | | | 14 | | 1 | 1 | 1 | 9 | 2 | 古(仮名序) |
| 13 | | | 4 | | | 9 | | | 3 | | | | | 3 | | 今集(詞書) |
| | | | | | | | | | 31 | | | 4 | | 27 | | 今集(左注) |
| 19 | | | | 4 | | 15 | | | 46 | | | 21 | 1 | 7 | 17 | 竹取 |
| 30 | | | 3 | 3 | 3 | 13 | 8 | | 9 | | 2 | 1 | | 3 | 3 | 伊勢 第一次 |
| 22 | | | 1 | 3 | 2 | 10 | 6 | | 19 | | 1 | 3 | 2 | 6 | 7 | 伊勢 第二次 |
| 11 | | | 5 | 1 | 1 | 3 | 1 | | 27 | | | 2 | | 3 | 22 | 伊勢 第三次 |
| 70 | | | 3 | 15 | 15 | 29 | 8 | | 154 | | 1 | 24 | 6 | 22 | 101 | 大和 |
| 53 | | 1 | 4 | 10 | 9 | 22 | 6 | 1 | 162 | | | 2 | 3 | 9 | 148 | 平中 |
| 16 | | | | | | 3 | | | 81 | 2 | 1 | | | 4 | 10 | 落(巻一) |
| | | | | | | 4 | 2 | | | | 1 | 1 | 2 | 3 | 10 | 窪(二) |
| | | | | | | | 1 | 1 | | | | | 2 | 9 | 4 | 窪(三) |
| | | | | | 1 | 3 | 1 | | | 1 | 4 | 3 | | 8 | 16 | 窪(四) |
| 134 | 7 | | 2 | 15 | 4 | 95 | 11 | | 315 | 16 | 19 | 22 | 15 | 131 | 112 | 源氏 |

| カ 計 | かなた(あ) | かしこ | かれ 他 | かれ 人 | かの 他 | かの 人 | 地の文 指示語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | | | | | 3 | | 古(仮名序) |
| 13 | | | | | 8 | 5 | 今集(詞書) |
| | | | | | | | 今集(左注) |
| 12 | | | | 1 | 9 | 2 | 竹取 |
| 8 | | | | | | 8 | 伊勢 第一次 |
| 7 | | | | | | 7 | 伊勢 第二次 |
| 6 | | | | | 2 | 4 | 伊勢 第三次 |
| 22 | | | | 1 | 7 | 14 | 大和 |
| 24 | | | | 2 | 4 | 18 | 平中 |
| 36 | | | | | 4 | 1 | 落(巻一) |
| | | 1 | 1 | 1 | 12 | 7 | 窪(二) |
| | | 1 | | | 3 | 1 | 窪(三) |
| | | | | | 2 | 2 | 窪(四) |
| 161 | 6 | 11 | 1 | 2 | 69 | 72 | 源氏 |

ゆえに、古今集は全体的に、歌に視点の中心を置いているということが指示語からもよくわかる。「ソノ」については、下に「その男」のごとく、人に係ってゆく用法は皆無であるし、「ソレ」が人をさす例もない。この傾向は他の作品でも同じである。「カノ」は、仮名序では、ならの帝の「御世・御時」を示していて、遠い昔を心理的距離としてとらえているのであろう。が、詞書に多い「カノ」は、どう解すればよいだろうか。十三例中、業平の詞書に五、哀傷部に五例あり、他の三つは、かの昔（恋736よるか）、かの家の

主（春上42貫之）、かのをば（賀348遍照）である。哀傷・賀・その他の例は、遠い昔や、今は亡き人やその家に用いているものが多い。

なお、古今集業平関係の詞書で、指示語があるもので、伊勢物語でどうなっているか比べてみると、古今集詞書に指示語が多く、伊勢物語に少ないといえる。（　）は伊勢物語である。×印は指示語がないか相当語のないものを示す。

410その沢の辺（九段その沢の辺）419この歌（八二段×）618かの女（一〇七段×）632かの道（五段その道）705かの女（一〇七段×）706ある女（四七段×）747かの西の対（四段×）969ここかしこ（四八段×）970かの室（八三段×）971そこなりける女（一二三段×）

古今集カノ5　ソノ1　コノ1

伊勢　カノ0　ソノ2　コノ0

「ソノ」については、仮名序・詞書に夫々九例づつ用例がある。

。そもそも歌のさま六なり……。その六くさの一つはそへ歌……

（仮名序）

。在原業平はその心あまりて……（同）

。田村の帝の御時に、斎院に侍りけるあきらけいこのみこを母あやまちありといひて、斎院をかへられむとしけるをそのことやみにければよめる（885詞書・尼敬信）

仮名序では「ソ」は、歌や六歌仙をさすものがほとんどであり、すぐ直前か近くの語句をうけている。詞書の「ソ」も、直前か近くの語句をうけているが、大体において、「ソ」のある詞書は、古今集詞書としては長いものがほとんどである。そして「ソノ」は下に人が付かず、所・物・歌・時・事などが続く。「コ」は、「話し手の感覚可能な領域の指示に限られていた」のに対し、「ソ」は、「方向指示の存在は、上代において確認できない」し、従って、「ソ」を「観念的な指示」とみなして「文脈指示に片寄り、空間よりも時間の軸に傾く」（以上、橋本四郎「古代語の指示体系」『国語国文』昭41年6月）といわれることと大いに関係しよう。即ち、「ソ」は、現場を指示するというよりは、叙述の一部の同語反復を避ける、或いは要約するものとして用いられていることが、古今集の仮名文からも認められるのである。古今集の仮名文は、物語文ではない特殊な初期の仮名文であるがゆえに、物語の文よりもかえってその文の特色が目立つところがあるが、指示語の面からもそれがいえるわけである。「コ・ソ・カ」ともに、突然には現れず、前出の語句をうける点で共通しているが、「カ」は、かなり文脈的に離れていても用いているし、突然にも用いうるのである。又、「コ」は、歌そのものをうけて「この歌」という表現が多く、このことから、「コ」は、現場指示の性格を有し、それを本来のものとして文脈指示をも行っていると思われる。「コ」や「カ」は、現場的方向指示が強くて、指示すると同時に、他から特立さす一種の強調表現にもなりやすい。が、「ソ」は、まだ現場的方向指示能力はうすくて、何かの語句をうけて指示する能力を専らにしていたと思える。「この女・かの女」というような、前出の「女」をうけつつも「コノ・カノ」が、女への強調表現にもなりうる用例は、「ソ」にはうすかったのではないだろうか。詞書や物語における登場人物（特に二度以上述べられる）は、そのストーリーに重要な人であるはずだから、二度目に述べる場合、「コノ・カノ」が冠されてこそその人物が特立されこそすれ、「ソノ」では、単なる同語反復回避や要約であって、人物は特立されにくかったようだ。特に、「ソノ」の下に人物が付きにくいのは、このように、語り手が居て、語り手側から人物を述

べてゆく文章やそういう姿勢をとった文章においては納得できるのである。この傾向は、以下に述べる物語文において著しく認められるものなのである。

—竹取物語—

竹取物語も、文章史上特殊なものとされている面が多いが、指示語からみてもかなり明らかな特色を出している。コ＞ソ＞カの順に多いことは後述するとして、「ノ」に付くか、「コレ・ソレ・カレ」以外の形はみられないのである。これは訓読文の傾向と重なる（築島裕『平安時代漢文訓読語につきての研究』402～435頁）。竹取では、「コノ」と「コレ」がほぼ同数で、しかも「コレ」は「これを見る（御覧ず等も含む）」が七例（一例は「見る」の省かれたものとみて）、「これを聞く（聞しめす等も含む）」が十四例で、他の一例は、草子地「これをなむたまさかにとはいひはじめける（69）」である。即ち全て「これを」であり、しかも草子地の一例以外は全て「見る・聞く」に続いている。「これを」と続くのは、漢文訓読の影響を受けたものとされる（井手至後述論文）。「見る・聞く」が多いのは、この物語に「いはく……といふ」のごとき伝達動詞の多いのと関連して、そういう具体的日常的行動を描きつゝ述べてゆく一種の稚さであろう。なお、「ソレ」も、四例中三例が「それを見る」であり、他の一例は、草子地的な「それよりなむ……とはいひける（88）」である。又、「ソ」は、特立的表現性はうすかっただろうと述べたことと関連させていうと、「コノ・カノ」で特立させた物の中に「この玉の枝(62)」「この皮衣(72)」「かの鉢(60)」があり、「ソノ」には、難題中の物の続く例はない。即ち、ストーリーに重要な難題中の物は、「コノ・カノ」で特立さすべき物であり、特立機能の少ない「ソノ」では物足りず、用いられなかったと思われる。しかも難題中のこの三つは、竹取の原初からあったといわれている物なのである。「コノ」や「カノ」は、その物を大写しにする役目を備えるが、「ソノ」にはそれがうすかったことが、ここからも肯えそうに思われる。又、ここでも、「ソノ」は、人に続く例はないし、「ソレ」が人をさす例もない。

—伊勢物語—

伊勢物語については、指示語総数では、ソ＞コ＞カの順になるが、三元的に成立したという仮説（片桐洋一『伊勢物語の研究』その他）に従って分類すると表のごとくになる。即ち、第一次では、ソ＞コ＞カの順であるが、「ソ」が圧倒的に多い。第二次も順位は、ソ＞コ＞カであるが、「ソ」と「カ」に大差ない。第三次では、コ＞ソ＞カの順になる。まとめ直すと、第一次のみが異るといえよう。第二・第三次を合わせると、コ＞ソ＞カの順となる。ここで気づくのは、第一次に「ソ」が多いのみならず、特に、「人」に付くのが多いのである。第二・三次では、共通して、人については「この人（男・女など以下同じ）」が、「その人」より多い。第一次の章段数は、第二・三次の章段数より少ないが、人に関しては、「その人」「かの人」が、「この人」よりかなり多いのである。これは、「ソノ」は人に続きにくいと前に述べたことと矛盾する現象である。他の作品をみても、地の文・会話文を通じて、「ソノ」は人に続きにくい（少なくとも、「この人」は「その人」より多い）。この第一伊勢のみが異るのである。伊勢物語は、「昔男ありけり」などで始まる形が多く、

その男は、どういう男かは以下に述べられるのであって、何の説明もなく、いきなり普通名詞「男」で紹介される形式をとる。その抽象的な男は、「その男……」となってはじめて具体的に描かれてゆく。抽象的一般的な男は、まだ説明も何もされていず、「この男」「かの男」として特立されるべき内容をまだ知らされていない。したがって、特立機能の少ない「ソノ」の方がふさわしいと思われる。伊勢物語は、昔男を一般的抽象的に提示して、以下に次々と具象化してゆくのであるから、「その男」のみならず、「その沢」「そこ」というように、上の部分を要約しつゝ下へ描写を広げてゆく方法をとらざるをえない。その場合、客観的に、語り手が語りの位置をとろうとすると、「コノ・カノ」よりは「ソノ」がよい。なぜなら、「コノ・カノ」を用いると、語り手は「コ・カ」の持つ、語り手からの方向指示作用によって、語りの時点へ「この男」なり「コノ」で修飾される語をひきだしてくる。語りの現時点にクローズアップさせるのである。そこに語り手の関心度が出て、聞き手へ直接提示して、登場人物や物、そして語り手・聞き手とを一つの同じ場に並べてしまう（その端的な例は、草子地といわれるものである。草子地には「これは二条后の……」（六段）や、「この人は思ふをも思はぬをも……」（六三段）のように、コ系が多い）。ゆえに、物語の内容の時点に従って、語り手が、客観的位置で述べるなら、ソ系になってゆくだろう。そして昔男がいろいろ説明され、知られるにつれ、「この男・かの男」と特立されても聞き手はついてゆける。

。昔男ありけり。いかがありけむ、その男すまずなりにけり。……今の男のものすとて一と日ふつかおこせざりけり。かの男いとつらく……（九四段）

のように、「その男」ではじまって、別の人に描写がゆき、再びその男に戻ってくる時は、「かの男」でよいのである。又、昔男について修飾語や説明や描写があってからは、「ソノ」がなくとも、「この男・かの男」で述べられる。

。昔男ありけり。宮仕へ忙しく心もまめならざりけるほどの家刀自……人の国へいにけり。この男……（六十段）

ところで「ソ」は、「不定指示的用法」もみられ、公式令などには日本独自の用字「其」が多用されているといわれる（「其事云々、度其関住其国……」橋本四郎前述論文）。「其」の個処に固有名詞が充塡すべく任されているというのは、興味あることである。なぜなら、「其国」「其関」は、事実は固有名詞が冠されてゆくべきものとしての普通名詞であり、「昔男ありけり。その男……」と事情が似るからである。想像をたくましくするなら、こういう漢文書式を知っている人なら、伊勢物語を書くに当って、いきなり普通名詞「男」を出して、「その男」として以下に述べつゝ固有名詞化してゆく方法も不自然でなかったと思われる。むろん、そんな事情よりも、第一次は、ソ系が圧倒的に多い文体であり、その影響で、人についても多くなってしまったと解するのが正しかろうが、ではなぜ第一次にのみそれほどソ系が多いのか。

。昔男ありけり。その男……ゆきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは……。その沢のほとりの……食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て……（九段）

のように、ソ系で統一したとみてよいくらいの章段もある。これは恐らく、語り手の聞き手意識度と関連することによる文体の差異と

思われる。第一伊勢は、聞き手をそれほど意識せずに書こうとし、第二・第三になるにつれ、聞き手をめざして語るように書くことが出来るように文章に慣れてきたからではなかろうか。伊勢物語は、主観を交じえず叙述し（渡辺実「平安文章史上の源氏物語」『文学』昭42年5月）、その簡潔な文体などから漢文の影響が考えられている（玉上琢弥「物語音読論序説」『源氏物語研究』）。特に、第一伊勢は、漢文的下地があった、少なくとも書きことば的であったと考えるならば、第一伊勢にソ系の多いことの説明がしやすい（当時の口語に近かった平安時代の和文の中に、源氏物語のやうに近称の指示語の使用が多いものと、枕草子のやうに中称の指示語の使用の多いものとがみられる」のは、口語と文語との間に存する制作態度の違いと考えられている。井手至「文脈指示語と文章」『国語国文』昭27年9月）。ここで、おもしろい事実がある。古今集仮名文の中で、仮名序は、コ＞ソ＞カとなるが、詞書は、ソ＞カ＞コとなっていたことである。即ち、仮名序指示語は、竹取や第三次伊勢や後述の大和・平中物語などの歌物語類と同じ傾向を示すのに、詞書は、第一伊勢と同じく、ソ系が多いのである。歌物語類の中で、第一伊勢と古今集詞書のみが、ソ系が多いのは偶然ではなさそうである。伊勢物語の中で、語り要素を示す係助詞「ナム」の使用数をみると、第一伊勢が最も少ない。恐らく、第一伊勢は、第二・第三伊勢よりも語りの要素がうすく、書きことば的であったことに基因するのではないだろうか。「ソ」が、第一から二、二から三次へと次第に減るのは、次第に聞き手をめざして語りに近い文体になっていったということであろう。又、詞書も帝を意識して書いたといわれる。「ナム」の少なさからみて、書きことばの要素が強いと思われる（たとえ語るように書くとしても、帝を聞き手として語り手が「コ」「カ」を用いて、帝を親しく語りの現場に持ち出すよりは、ソ系を用いて、客観的に描写する方がふさわしいだろう）。いずれも、語る通りに書くことに慣れない時代であって、そこに固さが入ってしまったと思われる。「ソ」は、方向指示機能がうすかったから、「コ」でも「カ」でもない中性的な「ソ」が、直接聞き手をめざさない客観的叙述にはふさわしかったし、文脈指示傾向の強い「ソ」が、現場指示の強い「コ」「カ」よりも、書きことばに向くのは察せられる。詞書と第一伊勢に「ナム」の少ないことと、ソ系の多いこととは同じ現象と思われるのである。ついでに、仮名序は、歌物語文にならって、聞き手をめざす口調がみられる（係助詞「ナム」や「ケリ」の多用など）。が、発生的には、書くために書かれたものであろう。訓読語の混じることや、対句仕立ての文章があるのみならず、代名詞指示語「ソ」に助詞の「ノ」のついた形の多さから、漢文訓読語の影響がいわれている（井手至前記論文）。即ち、仮名序は、書きことばの中に、語り口調を混入して和らげた文章といえよう。

### ―大和物語・平中物語―

大和・平中物語とも、表示のごとく、コ＞ソ＞カの順にみられる。これはすでに述べたように、古今集仮名序・竹取・第三伊勢と共通のあり方である。ということは、歌物語の文体の特色といえるのではないか。これは、実は、会話文でみたのと同じ順序なのである。会話文は、話しことばそのものではないし、地の文の文体の影響も大いにある。にもかゝわらず、どの作品の会話文もこの順序なのは注目に値する。会話文に、話し手・聞き手の感覚可能な語と

しての「コ」が多用されるのは当然であろうし、時間的にも心理的にも、文脈上「コ」が多くなるのであろう。会話文一般と、古今集仮名序・竹取・伊勢・大和・平中とが、コ＞ソ＞カの順になっているのは、これら歌物語（及びそれに類する作品）の文章が、指示語からみて、話しことばに近いといえよう。即ち、「コ・ソ」で、鎖式に場面や文を連ねてゆき、話し手・聞き手に時空心理的に近い事柄として話が進め展げられてゆく。「カ」が少ないのは、それだけ平面的に述べられているからであろう。したがって、場面転換も少なくなって、一つ一つの場面が、まとまって描かれる。「カ」は、話し手にも、聞き手にも遠い事物であるから、相互了承はあったとしても、「コ・ソ」と違って、時空的心理的に文脈上に広がりを持つ。「コーカ」が相対的に用いられ、「コーソ」の二元が中心であった上代では、コ＞ソ＞カの順でなかったか、意味が異ったかもしれない。「コーソーカ」の三元的関係が確立するにつれ、会話文や話しことば的な文が、コ＞ソ＞カの順になっていったのではなかろうか。「カ」が遠称として確立してきたから、かえって、会話文という、普通の日常的な言語生活の場において、話し手・聞き手中心の「コ・ソ」が多くなっていったのではないか。会話文に「カ」が出るなら、現場に遠いものを指す以外では、会話の内容に一種の偏り（以前に述べた話の続きや、昔話をする時や、物語めいた話をする等）がある場合になりやすかろう。実例でみると、現場の空間的に遠い「カ」以外は、心話文に多いようであり、それは、その人の心の中で、その話が続いているのである。

。かの頼め給ひしこと、このごろのほどにとなむ思ふ。（大和361忠岑の会話文中での自分の心中）

。もしかのあはれに忘れざりし人にや（源氏夕顔116源氏の心中）

心話文は、聞き手をめざさないから、「カ」を用いてもかまわないが、聞き手をめざすなら、聞き手に了承された事物でないと用いにくい。ゆえに、会話文に「カ」が用いられると、話の内容は「コーソ」のみの場合よりも立体的になってゆく。歌物語類は、話がかなり単純化されて述べられ、焦点をしぼり、平面的に描くのを原則としている。ゆえに、「カ」が少ないと思われる。「カ」が用いられると、逆に、場面転換になってしまうことが源氏物語などに多いのも、そのせいであろう。

。御使帰り参りて翁の有様申して奏しつることども申すを聞しめしてのたまふ。「一目……いかが思ふべき」。／かの十五日、司召に仰せて……（竹取99）

。耳かしがましかりし砧の音をおぼし出づるさへ恋しくてまさに長き夜とうちずんじてふし給へり。／かの伊予の家の小君参る折あれど……（源氏夕顔145）

歌物語類には、「カ」で場面転換までしているとみられる例はほとんどみられない。「ソ」や「コ」でよいと思われる個処に「カ」が用いられている。「カ」でなければならぬこともなく用いられたものが多い。

。忠文が陸奥の将軍になりて下りける時にそれがむすこなりける人を監の命婦、しのびてあひ語らひけり。うまのはなむけに……やりたりける。かのえたる男……（大和314）

。この、名借りたる男は気色みて走りにけり。言伝へけるもの、女ども、夜のうちに隠る。それをかの名借れる男は聞きて……（平中516）

即ち、主語が一度変って再び戻す時などに用いられている。せいぜい主語の転換であって、場面転換とまでゆかないだろう。この二例とも、「かの男」はその段の主人公である。

―落窪物語・源氏物語―

落窪・源氏とも、作り物語といわれるが、いずれも指示語は、コ／カ／ソの順になっている。これは、歌物語類と異る。コ―ソ―カの三元的関係がかなり確立した段階での作品と思われる上に、語り内容が歌物語に比し、はるかに複雑で、場面も描写も、したがって叙述も、平面的なものではすまされにくい場合が多くなり、遠称のカ系が増えたと思われる。

。御厨子に来て、「あが君／／」といひて、かの白き米多くにかへて御台まゐりに来ぬ。（「かの米」は数頁前に述べた米。落窪巻一78）

。（軒葉荻は）まだいと若き心地に、さこそさしすぎたるやうなれどえしも思ひわかず。（源氏はこの女を）憎しとはなけれど御心となるべきゆゑもなきここちして、なほかのうれたき人（空蟬）の心をいみじくおぼす。（源氏空蟬100）

話題の現場になき人や、以前述べた物事について「カ」を用いて、現場に取り入れてくるやり方である。話の内容は重層的になってくる。又、「カ」によって、場面を大なり小なり変える（元の話に戻したり）場合などにも多く用いられているのは、この落窪・源氏に多いことはすでに述べた。

。あこぎ……わびしと思ふ。少将と帯刀とは……し給ふ。ほど／／にしふねく心ふかくなんおはしける。／かの語らひせし少納言……（落窪巻二冒頭108）

## 文章史上の指示語

以上のようにみてくると、指示語の使用度数からみる限り、竹取・伊勢（第一伊勢除く）・大和・平中などの歌物語類の地の文は、コ／ソ／カであり、それは歌物語及び作り物語の会話文と同じ傾向を示していることがわかる。即ち、歌物語の文章は、会話文の指示語の用い方であり、互いに近いといえる。歌物語は、本来は、語るものから出発しただろうから、この傾向はうなずける。作り物語は、地の文は、コ／カ／ソで、会話文や歌物語と異っているのは、仮名文を書くことが普通になってきて、むしろ語るように初めから書かれたゆえであろう。会話文や歌物語は、概して、平面的であり、作り物語は立体的に叙述されているといえよう。ここでちょっと注目すべきは、「人」に続く例についてのみ眺めると、会話文・地の文とも、コノ／カノ／ソノ／の順になっていることである。源氏・落窪の会話文も地の文もそうであるし、歌物語の地の文もそうである（歌物語会話文のみは、コ／ソ／カになっている。コノ／ソノ／カノ、コレ／カレ／ソレ。恐らく地の文コ／ソ／カの影響と思われる）。即ち、「人」についての傾向は、落窪・源氏の地の文一般の傾向と同じなのである。前に述べた「ソノ」が「人」と結びにくいという現象と同じと思われる。

コ―ソ―カが、近称・中称・遠称として、空間のみならず、時間的・心理的・文脈的にも確立して用いられてくると、語り手の視点が反映されているようで興味深い。竹取では、難題の物に「コノ」が用いられクローズアップの役をになわされていたりしたが、他の

| | | 地の文 | 会話文 |
|---|---|---|---|
| 歌物語 | 全 | こ＞　そ＞　か<br>この＞その＞かの<br>竹これ＞それ＞かれ<br>伊これ＝それ<br>大これ＝それ＞かれ<br>平それ＞これ＞かれ | こ＞　そ＞　か<br>この＞その＞かの<br>これ＞それ＞かれ |
| | 人 | こ＞　か＞　そ<br>この＞かの＞その<br>竹　こ　れ（一例）<br>伊　こ　れ（〃）<br>大<br>平それ＞これ＞かれ | こ＞　そ＞　か<br>この＞その＞かの<br>これ＞かれ＞それ |

| | | 地の文 | 会話文 |
|---|---|---|---|
| 落窪・源氏 | 全 | こ＞　か＞　そ<br>この＞かの＞その<br>これ＞それ＞かれ | こ＞　そ＞　か<br>この＞その＞かの<br>これ＞それ＞かれ |
| | 人 | こ＞　か＞　そ<br>この＞かの＞その<br>これ＞それ＞かれ | こ＞　か＞　そ<br>この＞かの＞その<br>これ＞それ＞かれ |

（注）「コ・ソ・カ」は、全ての形の総数（大部分は「コ・ソ・カ」及び、「コノ・ソノ・カノ」と「コレ・ソレ・カレ」である）による順位を示したものである。

作品でも、やはり、コ系によってうける効果は、それが語り手の視点の正面に据えられているということであって、必然的に、その場面では大写しにされる。

。たたむ紙の手習いなどしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。……。……。このたたむ紙を取りて寝殿にわたり給ひぬ。（源氏賢木179～180「このたゝむ紙」は重要な証拠の品である）

源氏物語では、コ系は、源氏やその巻に重要な人物に多い（桐壺巻では源氏に、夕顔巻では源氏と夕顔に、若紫巻では源氏と紫上に、須磨巻では源氏に、等々）。むろん各場面場面での中心的事物や人物にもコ系が用いられやすいが、全体的にみると大体そのようである（各巻で確認している）。だから、叙述においてかなり離れていた主要人物に、「コ」を用いることも稀ではない。

。さきの世にも御ちぎりや深かりけむ、世になく清らなる玉のをのこみこさへ生れ給ひぬ。……（以下、更衣のことを述べて二頁ほどある）。更衣の曹司を他に移させ給ひて上つぼねに賜はす、その恨みましてやらむかたなし。このみこ三つになり給ふ年……（源氏桐壺26～28）

ところで、物語には絵が伴っていたといわれる。現存源氏絵巻などその絵は、本文をよく理解した人が本文にかなり忠実に描いたといわれている。今、指示語と関連させるべく、例えば、橋姫巻の薫が透垣のやり戸をあけ、中の姫君達をのぞく絵をみてみる。

。あなたに（源氏物語絵詞も同じ）通ふべかめる透垣の戸を少し押

しあけて見給へば、月をかしきほどに霧わたれるをながめて、簾を短かく巻き上げて人々居たり。……奥の方より「人おはす」とつげ聞ゆる人やあらむ、おろして皆入りぬ。……あはれと思ひ給ふ。（源氏橋姫110～111）

絵をみる人は、右端の薫に目を置き、文章と同じく薫の目で左の「あなた」の姫を見るのである。平面上に描かれていても、薫に視点を置くから、姫は遠くになることになる。物語において、コーソーカという三元的遠近法が整ったことは、物語絵における一つの場面を描くのに、本文に従ってある人物や物を視点の中心において表現するやり方を容易にさせたであろう。源氏絵巻の遠近法は、現代のそれとは異るようであるが、それは、視点とも関係するものと思われる。夕霧の巻で、雲井雁が夕霧の持つ手紙をのぞきにゆく場面において、文章ではその手紙に「この御返り」「この文」と「コ」を用いて大写しにしている。

。よひ過ぐる程にぞ、この御返り（源氏物語絵詞も同じ）もて参れるを……女君……はひ寄りて御うしろより取り給ひつ。……さすがにこの文のけしきなく……（源氏夕霧111～112）

そしてすぐ続いて次の文章がある。

。男はこと事も覚え給はず、かしこにとく聞えむと思すに……。ただ知らず顔に硯おしすりて……（同113～114、「かしこ」は夕霧邸からみて御息所）

これは、絵巻でみると、夕霧邸である。手紙硯が大きく描かれすぎているのは、それだけ大写しにされた本文と呼応している。恐らくは、物語内容と呼応して、物語の文章と同じ遠近法によって眺められたように思われる。（絵のことまで触れるべきでないが、現代語でわからない指示語を考える場合の小さな参考にはなるだろう）

すでに述べた例の中にもみられたが、現代の指示語と異る用法のものも少なくない。

。折々のこと思ひいで給ふに、よゝと泣かれ給ふ。夜ふけ侍りぬと聞ゆれど、なほ入り給はず。その夜、上のいとなつかしう昔物語などし給ひし御さまの……（源氏須磨52）

現代語なら「かの夜・あの夜」であろう。前巻で出た場面を突然出してくるのであるから。

。但馬の国に通ひける兵庫の允なりける男の、かの国なりける女をおきて京へのぼりければ……（大和325）

現代語なら「その国」というところだが、京からみて遠いから「かの国」というらしい。

。されば女の墓をば中にて、左右になむ男の墓ども今もあなる。……さてこの男は……。いまひとりは……。かの塚の名をば乙女塚とぞいひける。（大和387）

現代語なら、直前まで塚の話があるから「この塚」とするところであるが、古い話ということで、心理的・時間的に遠い「かの塚」としたのだろうか。

。おなじ帝、狩いとかしこく好み給ひけり……。かの道に心ありて……（大和400）

これも直前まで狩の話だから「この道・その道」とするのが現代である。

。（手紙を）さしとらせて……とて出でぬれば……とてはしりうち給ふ。かの文を……（落窪巻一105）

これも現代なら「この文・その文」であろう。

。といむとくなるわざかな……」などさだむるに、この典薬助といふしれ者翁ありければ……（落窪巻二164）

この典薬助は、かなり以前に出ていて、当面は出ていないのに「コノ」が用いられた例である。かといって、ここで彼は中心人物ではむろんない（絵があるとすれば、この場面の絵には典薬助が描かれているので「コノ」となるのかもしれない）。現代なら「あの」「例の」であろう。即ち、前との脈絡と必ずしも論理的に関係せず、近しいと語り手の感じたもの、近しく描きたい物事には「コ」を用いたのであろう。が、「ソ」「カ」についてはまだよくわからない面がありそうである。「ソ」は中性的だから、「カ」でも「コ」でもかまわないところをうけうるのだろう。又、「ソ」は中性的であるがゆえに、時と結ぶことも多く、「その時・その頃・その夜……」というように用いられ、場面転換になる例も多い。

。さて、その夜、久しくいかざりければ男いとほしがりて……（平中483）

。よろこびにおきたちて願立てさす。……北の方憎しとく死ねかしと思ふ。／その日になりて、いと清げにさうぞきて男君女君……（落窪巻四210）

。大殿には……。／その頃、斎院も下り居給ひて……（源氏葵90）

以上のごとく、指示語を眺めてきたが、それは各方面に関連してゆく問題をはらんでいて、それぞれにきめ細かく考察しなければいけないし、もっと指示語の本質にも入ってゆかねば明確にしがたい面も多い。とりあえず文章史的な面に焦点をしぼりつゝ、それも大まかな流れから観察してきた。

テキスト

古今和歌集・源氏物語（角川文庫）竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語（小学館日本古典文学全集）落窪物語（岩波日本古典文学大系）

（光華女子大学助教授）